

『ファルスタッフ』プログラム・ノート

『ファルスタッフ』は、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813～1901）が作曲した最後のオペラです。70代に入り、前作の『オテッロ』でも成功を収め、大作曲家として磐石の地位を築いていたヴェルディは1887年、『オテッロ』の台本作家でもあるボーイトが持ち込んだ台本の草稿を大変気に入ります。その内容は、シェイクスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』をもとに『ヘンリー四世』の一部分を加えた喜劇でした。そこから4年の歳月をかけて創作が進められ、1893年2月9日、ヴェルディ79歳の冬にミラノ・スカラ座で初演されると瞬く間に評判は拡がり、世界中の歌劇場で再演されました。

物語の舞台はヘンリー四世治下（1399～1413）にある、中部イングランドのウィンザーの街。主人公は、ふくよかで好色な老騎士のジョン・ファルスタッフ卿。ファルスタッフは、メグとアリーチェという、共に夫を持つ身である二人の女性を相手に、全く同じ内容の恋文を送るのですが、そのことが二人の夫を含む周囲の人々に知れ渡り、罣を仕組まれ二度も懲らしめられてしまう（一度目は洗濯籠ごと川に放り出され、二度目は深夜の公園で妖精（のふりをした人間）の脅しに合う）というあらすじです。

今回取り上げられる第3幕第2場は、オペラ最終場となる公園の場面。まずはアリーチェの娘ナンネッタと恋仲にあるフェントンの独唱から幕を開け、そこへアリーチェが現れて仮装の衣装を渡し、一同が隠れたところでファルスタッフが登場。真夜中の12時を知らせる教会の鐘が鳴るとアリーチェが姿を見せませんが、そこにメグの叫び声。「妖精を見ると死んでしまう」といういわれを信じ、怯えて隠れながら横たわっているファルスタッフに、アリーチェの夫フォードをはじめ、医者のカイウスや、ファルスタッフの従者であるバルドルフォとピストーラなど、妖精や魔女に扮した登場人物が一斉に襲い掛かります。やがて、全員の正体が判明する最中ですべての企みが明らかとなり、最後はナンネッタとフェントンの結婚をフォードが認める、という流れに。ファルスタッフが「この世のすべては冗談だ、最後に笑う者が一番幸せ」と語り、一同が加わって賑やかな終幕となります。

ヴェルディはボーイトへの手紙で繰り返し、「この作品は自分の楽しみのために作曲している」と語ったそうです。登場人物同士の、人間の弱さを含んだ複雑な心情と駆け引きが、ユーモアたっぷりに深い包容力に抱かれ、成熟を極めた作曲技法で巧みに描き出された作品だと言えるでしょう。